

平成24年度 第1回CCC国際関係学グループ運営委員会 議事概要

I. 日 時：平成24年4月13日(月) 14:00～

II. 場 所：私立大学情報教育協会 事務局 会議室

III. 出席者：林委員 佐渡友委員 多賀委員

(事務局) 井端事務局長 森下主幹 松本職員

IV. 議事概要

1. 学士力実現に求められる教育改革モデルの検討

①教育改善モデルの点検・評価・改善について

事務局より会議開催に先立って、平成24年度第3回国家戦略会議資料の抜粋(次世代の育成と活躍できる社会の形成に向けて、人材のイノベーションによる日本再生の実現にむけて)、中央教育審議会大学分科会大学教育部会「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」(審議まとめ)、H24年2月20日『文教ニュース』「中教審総会で就任して初の決意を表明」(平野文科省大臣)などの参考資料の紹介がなされた。

さらに、私立大学情報教育協会からの「情報通信技術による教育改善の研究-学系別委員会における教育改善モデル検討状況」(第3回臨時総会平成24年3月28日)、「大学教育への提言 ファカルティ・デベロップメントとIT活用」(2006年版)、「平成24年度事業計画書」が紹介され、委員より以下の意見が出された。

- ・ある大学では国際関係系3つのゼミが合同で発表会を行うが、まだたこぼ型の教育モデルは影響力が強い。
- ・学生には自分がやりたいことがあり、これを身につけさせるのが大学の授業である。しかし教員間で大学の壁を取り払うことに手を貸せば、文科省が狙う大学統廃合に手を貸すことになるのではないかと懸念されているのではないか。
- ・グローバル・リーダー・プログラムというのがあるが、文化密度の高い日本は競争で勝つのは難しい。現在の大学に不足しているのは、日本の魅力は何かということだろう。アメリカは文化密度が低いためにすべてに説明が必要。日本は文化密度が高いために、国際社会では明示的に説明する訓練が不足している。日本が競争に勝つためにはそのような訓練が必要ではないか。
- ・国際社会に出るとあうんの呼吸が出来ない。学生のパワーアップのためにはゼミナール教育が重要である。
- ・教員一人あたりの学生数は、欧米で4～5/教員1名。日本では15/教員1名である。欧米の大学はドライで所属感が少ないが、この人数ならそれでも問題は起こらない。文化密度の問題は、日本と欧米のどちらの文明が高いのかという問題に帰結する。競争社会では文明密度が低い方が有利である。低文明度に適応可能な多様性を育てる必要が高いのである。
- ・教員に力を付け、相対的に自分の力を確認するためにはICTは不可欠である。すでにICTは好きな人がやるものではない。グローバルな競争では、大学の中にとどまっていたは戦いにならない。理想の授業は、実地に自分のものとして現実への対応力を示すものだ。

- ・文明対文化の戦い。文化は沈黙、文化を尊重して例外を求めるか？スタンダード化は例外を認めない方法。culture と civilization は原語からして異なる別次元の存在。日本の文化はドイツ流で一般化しない存在である。一方、文明は普遍化を目指すもので文化とは別次元の存在。多様性とは文化の共生で、日本の高度な文化は多様性を目指す。源平合戦で平氏が勝利していれば日本はグローバル化したのかもしれない。トインビーは西欧文明の相対化を試みたが、サルトルらの実存主義で否定され、これがまたレビストロスで逆転、ミードらに引き継がれたと思われる。

続いて、教育改善モデルの点検・評価・改善について具体的な検討がされた。

- ・ネット上の学習支援システムを用いてグループ学習を行い、「基礎・基本の学び」を振り返る方法、結果を教員が判断し、成績によって差し戻す。
 - ・コンテンツの文節化を徹底して行い、テストでチェックし、必要であれば何回でも振り返り、再学習を行う。これをポートフォリオで確認、学習履歴を学生間の相互評価などによって確認する。
 - ・ある大学では現在、中国の大学とデュアル・ディグリーを実施している。高校でも中国語を必修にしつつある。海外5大学とグローバル・リーダーシップを進めつつあるが、現場の教員と事務職の協働態勢の構築、とくに事務職のマネジメント能力の育成が急務である。
 - ・博士課程や修士課程の大学院生によるチェックが有効である。ネット上に補完授業を置き、カリキュラム・フローの中で自己点検が可能な仕掛けが必要である。
 - ・関連科目の担当者から学生の振り返りを促す仕掛けをネット上に提供し、到達度はネット上の面接で自己確認してはどうか。
 - ・教員同士の学びが不可欠、政策提言レポートなどを行う。相互評価、発進、外部評価など、また大学間の政策提言コンテストなどが必要だろう。
- などの意見が出され、「授業の点検・評価・改善」について、文案をまとめた。

2. 今後の検討スケジュールについて

国際関係学教員に期待される専門性、教育改善モデル実現に求められる教育力について検討する予定。

- ・国際関係学教育の学識・理念とは何か。
- ・学識の4つの要素（発見・統合・応用・教育）に必要な教員の能力は何か。
授業改善マネジメントのFDの関連、授業モデルに対する指導力などを確定したい。

3. 電子著作物相互利用事業へのご協力について

資料に基づいて、事務局より協力の要請がなされた。

V. 次回の開催日程

日時：6月4日（月）10：00～12：00

場所：私立大学情報教育協会 事務局 会議室